

先日、二代目桂春之輔の襲名披露公演に招かれた。桂春之輔が、師匠の名前であった春之輔を継ぐことになったのである。二代目春之輔と初めて会ったのはもう15年ほど前になる。少しシャイな青年といった印象であった。よく通る声の特徴的で、広く大きな会場で映えるタイプのはなし家だと思った。襲名を機に独特の妙味が花開くことを願う。

ところで、襲名のように、「ある道歩み続ける中で、名前が変わる」という文化は実に興味深い。成長に応じて名前が変わる伝統・習慣は、世界各地であるようだ。日本でもかつては幼名の文化があった。**ア**の際に名前を変えたりしていたのである。あるいは、商家

左の記事を読んで下の問いに答えましょう。

- 1 空欄アに入る言葉を漢字2字で書きましょう。
- 2 **老舗**の読み方を書きましょう。
- 3 傍線部について「名前が変わる」ことでどんな効果がありますか。本文中から10字程度で二つ抜き出し、解答欄に合わせて書きましょう。(句読点や「」なども1字と数えます)

1											
2											
3											効果
											効果

* 解答は2P、記事全文は3P

NIEワークシート/中～高校

などで職場の地位が上がれば名前を変える習慣もあった。現代でも、**老舗**の主人が何代目・何兵衛と名前を継いでいるところがある。このような「変名文化」には、人類の知恵が潜んでいるに違いない。おそらく当人の成長を大きく促すことになるから、こんなことをやっているのであろう。何代も続く名前は、名前自体がある種の人格の集合体である。それらを背負うのであるから、やはりしっかりとした足腰が必要となる。

また、「名前が変わる」「新しい名前をもちろ」ということは、「自分濃度」を薄める装置でもあるのではないか。名前が変わらなければ、自分という存在がどこか終始一貫しているような認識になりがちである。自

分という存在が確たるものだと誤解するほど、自分濃度は濃くなっていく。自分濃度が濃ければ濃いほど、生きる上での苦悩は深まると仏教は説いている。

ただ、現代の社会システムにおいて、名前が変わるときさまざまな不具合が起こる。デメリットの方がずっと大きい。さまざまな契約変更が必要となるし、これまで積み上げてきたキャリアが生かせない場合も出てくる。そういう社会だからこそ、襲名という営みがなおさら興味深く意義あるものに思えてくるのである。刻々と変化し続ける自分という存在の真相を体得するのに、名前が変わる文化は有効な気がする。

宗教学者 釈徹宗

NIEワークシートのこたえ（2023年7月18日公開）

◆ワークシート「襲名する意義」

2023.7.11付朝刊 文化面 解答例

- 1 元服
- 2 しにせ・ろうほ どちらも可
- 3 当人の成長を大きく促す効果(11字)
「自分濃度」を薄める効果(10字)

散策路

先日、二代目桂春之輔の襲名披露公演に招かれた。桂春之輔が、師匠の名前であった春之輔を継ぐことになったのである。二代目春之輔と初めて会ったのはもう15年ほど前になる。少しシャイな青年といった印象であった。よく通る声が特徴的で、広く大きな会場で映えるタイプのはなし家だと思った。襲名を機に独特の妙味が花開くことを願う。

ところで、襲名のように、「ある道を歩み続ける中で、名前が変わる」という文化は実に興味深い。成長に際して名前が変わる伝統・習慣は、世界各地であるようだ。日本でもかつては幼名の文化があった。元服の際に名前を変えたりしていたのである。あるいは、商家などで職場の地位が上がれば名前を変える習慣もあった。現代でも、老舗の主人が何代目・何兵衛と名前を継いでいるところがある。

このような「変名文化」には、人類の知恵が潜んでいるに違いない。おそらく当人の成長を大きく促すこととなるから、こんなことをやっているのであらう。何代も続く名前は、名前自

襲名する意義と戒名



宗教学者 釈徹宗 ①

しゃく・てつしゅう 1961年大阪府生まれ。浄土真宗本願寺派如来寺住職。相愛大学長。「落語に花咲く仏教」で2017年河合隼雄学芸賞。「不干斎ハピアン」「喜怒哀楽のお経を読む」など著書多数。

体がある種の人格の集合体である。それらを背負うのであるから、やはりしっかりと足腰が必要となる。

また、「名前が変わる」「新しい名前をもちろ」ということは、「自分濃度」を薄める装置でもあるのではなからいか。名前が変わらなければ、自分という存在がどこか終始一貫しているような認識になりがちである。自分という存在が確たるものだと誤解するほど、自分濃度は濃くなっていく。自分濃度が濃ければ濃いほど、生きる上での苦悩は深まる

と仏教は説いている。ただ、現代の社会システム



「祝福の座」(撮影・森村泰昌)

そんな中、今も私たちの社会に息づいている変名文化に「戒名」や「法名」がある。もともとは「授戒」などの通過儀礼を経て、名付けてもらう仏教徒としての名前である。多くの場合、亡くなった時に付ける名前となつているため、実に変則的ではあるものの、広い意味での変名文化だろう。

しかし、できれば生前に授与される方がいいと思う。そうでないと名前が変わる意義が半減してしまう。洗礼を受ければクリスマス・ネームがもらえるように、仏教徒であれば戒名授与式で新しい名前を受け取ってもらいたい。きつと新しい生き方へと一歩を踏み出すことになる。